Project	地域協働専攻　国際協働グループ
14	**函館の民俗記録保存プロジェクト −函館のオシラサマを題材に−**
メンバー	［学　　生］　鳴海　麗 / 下山　昂大 / 藤田　月夜 / 中居　美穂 / 駒木　希奏 ［担当教員］　村田　敦郎

【背景】

東北地方で著名なオシラサマ信仰だが、実は道南地方にもこの習俗は伝わっている。過去に道南地域のオシラサマ信仰について言及している研究はいくつかあるが、体系的に調査されたのは1985年が最後であり、最新の調査を見ても2009年が最も新しく、オシラサマ信仰の現状は定かではない。オシラサマは、東北において民俗文化財として指定するほどの文化であるにも関わらず、現在の函館においては等閑視されている。そこで本プロジェクトでは函館におけるオシラサマ信仰の現状を調査することとした。

【目的】

函館に伝わる民俗文化であるオシラサマ信仰の歴史的展開と現状を記録する。また、将来的には津軽海峡文化圏における共通の文化要素、あるいは差異を明らかにするための基礎資料を作成したいと考えている。

【概要】

文献調査を通してオシラサマ信仰を理解し、道南のオシラサマ信仰の現状を把握した。フィールドワークでは文献から看取した情報をもとに関連する寺社を訪ね、宗教関係者とオシラサマ所有者にインタビュー調査を行った。

【プロセスと成果】

前期では文献調査とフィールドワークを行った。第一段階として文献調査を行い、オシラサマ信仰の現状を把握した。次にフィールドワークを行い、函館のオシラサマはどこに存在しているのかを調査した。その調査の結果から、函館のオシラサマが現存していることが明らかになり、持ち主にインタビュー調査をすることができた。毎月の月次祭に集う信者の中にオシラサマの祀り手がいるという情報を得たため、2022年7月10日に高宮大神にてフィールドワークを行った。神社を開いたのは先代のX氏（神霊を憑依を自らに憑依させお告げを行うセンセイ／カミサマと呼ばれる女性宗教者）で、現在はその娘のY氏が後を継いでいる。過去、高宮大神には10対ほどのオシラサマが連れてこられていたが、現在は1対のみとなっている。センセイのX氏が健在だったころは、信者とオシラサマを連れて神社仏閣を参詣し、修行をしていたという。参詣先ではオシラサマのオセンダク（着ている布）に御朱印が押され、修行によってオシラサマは「クライアゲ（位上げ）」をする。修行が終了して一人前の神様になることを「ミクライ（御位）に就く」という。5～60年ほど前にX氏が神様からのお告げを受けて、7対のオシラサマを授けられたとして、境内にあったクスノキでオシラサマを製作し、信者7人に祀らせた。そのうちの1対が月次祭に連れてこられていたA氏のものである。また、月次祭に参加していたD氏のもつオシラサマもこのとき授けられたものだが、既にミクライに就いており、D氏の自宅に安置されている。ほかの5対の現在は不明である。

次に渋谷道夫『道南の民間信仰』で紹介された、カミサマと呼ばれるZ氏の調査のために岩木神社へと向かったが、Z氏はすでに死去しており、ご子息のE氏にお話を伺った。岩木神社は昭和59年に閉鎖され、現在はアパートに建て替えられており当時の面影はない。当時は自宅兼神社であり、主に不動明王、龍神、オシラサマを祀っていた。Z氏が「カミサマ」として占い、祈祷、オシラサマアソバセなどを行っていた。E氏の所有するオシラサマのオセンダクには数多くの御朱印が押されており、Z氏が頻繁にオシラサマを連れて修行していたことがわかる。金糸で作られた立派なオシラサマで、首にはそれぞれメダルを下げている。呼称は「オヒラサン」で、普段Z氏の長女が保管している。祭日は決まっておらず、毎朝水をお供えするなどの簡易的な形でお祀りしているがゆくゆくは供養する（手放す）ことを考えている（現在、村田研究室でお預かりしている）。

後期では前期での文献調査やフィールドワークの成果をもとにアカデミックリンクに出展し、審査員特別賞を受賞した。また前期の調査で得た資料を見直し、整理をした。神職のK氏がオシラサマを所有しているという情報があったため、お話を聞く機会をいただいた。K氏がオシラサマを祀ることになったきっかけは、昨年2022年の5月ごろに祀り上げ（神社の廃業や神棚の処分のこと）の依頼を受けたことである。依頼主の祖父が祀っていた「オーヒラサン」を祀り上げてほしいと言われ、一般の神棚だと思って訪ねたが、そこにあったのは扉付

きの木箱に入ったオシラサマであった。2対目の小さいオシラサマを祀るきっかけは、「祀れなくなった」という人が函館八幡宮に直接持ち込んできたことだった。元々、訪問者の母が祀っていたものだが、オシラサマの由来もルーツも不明で、もう祀れないとのことだったため、預かることにしたそうだ。
現在までは複数人の宗教関係者やオシラサマ所有者にお話を伺うことができた。引き続きオシラサマの所有者を探して、調査を行いたい。

K氏の所有するオシラサマ

村田研究室のオシラサマ

【総括と反省・今後の課題】

フィールドワークを通して、函館のオシラサマ信仰が衰退しつつあることが明白になった。推定される原因として、まず女性宗教者（カミサマ/センセイ）の存在がほとんどみられなくなったことがある。また、オシラサマの継承者が少なくなっていることで、オシラサマの祀り方や伝統などが失われつつあるためだと考えられる。高宮大神ではセンセイが健在だったころはオシラサマアソバセを行っていたものの、伝承者がいないことや引き継いだ人もやり方がわからないという理由から、簡易的なものとなっている。またオシラサマを祀る神社が廃業するなどもあり、オシラサマ文化全体が廃れつつあるといえるだろう。大湯卓二によると「オシラサマは望むものの意志によって祭祀が可能というのではなく、オシラサマから選ばれた特定の人、オシラサマと宗教的邂逅が伴わなければ祀ることはできない」としている（「津軽地方における「授かるオシラサマ」の土壌信仰」『青森県の民俗』2008：p11）。オシラサマのような「授かりカミ」の習俗は津軽の信仰土壌の中で伝統的に継承され、その霊的能力はイタコやカミサマによって保持され実践されてきたと考えられるが、現在は女性宗教者そのものの数が減少していることから、新しいオシラサマが誕生するのはもちろんのこと、オシラサマの存続が難しいものであることが明らかとなった。

本プロジェクトにおいては今後の展望として、オシラサマという宗教文化の維持および文化財保存への提言を行う予定である。我々はこれまでの調査を踏まえて、オシラサマに対して民俗文化としての文化的価値を見出していくことを課題に挙げていた。このことに関して、オシラサマ信仰の価値づけの是非についても再考していきたい。さらに文化が衰退していることに変わりはないが、その文化を引き継ぐことの意味合いを考え直す必要があるとも考えている。オシラサマがパーソナルなカミサマ・現代のカミサマとして変容していくという可能性もある。時代に即してカミサマの在り方も多様に変容していることから、現代に「生きる」オシラサマの存在意義を引き続き考察していきたい。

【地域からの評価】

・オシラサマ信仰について函館市教育委員会生涯学習部文化財課に問い合わせをした際、本プロジェクトの調査資料や報告が文化財保存の発見や保存に寄与することを期待しているとのことであった。
・オシラサマに関わる宗教関係者や所有者の方々からも、その成果が期待されている。
・キャンパスコンソーシアム函館の企画である「HAKODATEアカデミックリンク」において、審査員特別賞の評価をいただいた。

【年間スケジュール】

4月　村田先生によるオシラサマについての授業
5月　文献調査：函館におけるオシラサマ信仰の把握
6月　フィールドワークの予備調査
7月　インタビュー調査、資料の整理
　　地域プロジェクト中間発表
10～11月　HAKODATEアカデミックリンク出展
　　※審査員特別賞　受賞
12月　調査資料のまとめ
1月　地域プロジェクト　成果発表